

梟娘の話

岡本綺堂

青空文庫

天保四年は癸巳年で、その夏四月の出来事である。水戸在みとざいじ
 城ようの水戸侯から領内一般の住民に対して、次のやうな触渡ふれわたし
 があつた。それは領内の窮民きゆうみんまたは鰥寡孤独かんかの者で、その身
 がなにかの痼疾こしつあるひは異病いびようにかゝつて、容易へいゆに平癒へいゆの見込み
 の立たないものは、一々いちいち申出るといふのであつた。

城内には施薬院せやくいんのやうなものを設けて、領内のあらゆる名医
 がそこに詰めあひ、いかなる身分の者でも勿論もちろん無料で診察して
 取らせる、投薬もして遣やるといふのであるから、領内の者どもは
 皆その善政をよろこんで、名主なぬしや庄屋しょうやをたよつて遠方からその
 診察を願ひに出てくる者も多かつた。

ところが、眼めのさきの城下に不思議の病人のあることが見出された。それは下町の町人の娘で、文政ぶんせい四年生れの今年十三になるのであるが、何どういふわけか此世このよに生れ落ちるとから彼女かれは明るい光を嫌つて、いつでも暗いところにあるのを好このんだ。少しでも明るいところへ抱かかへ出すと、かれは火のつくやうに泣き立てるので、両親も乳母うぼも持もて余あまして、よんどころなく彼女を暗い部屋で育てた。それが習慣になつたかして、彼女は起たつてあるくやうになつても矢やはり暗い部屋を離れなかつた。しかも彼女は決して盲めくらでもなかつた、跛足びつこでもなかつた。殊ことにその容貌きりようはすぐれて美しかつた。赤児あかごのときから日の光をうけずに育つたにも似ないで、かれの顔は玉のやうに輝いてゐた。戸障子としようじを立て籠こめて、

その部屋はすべての光を防ぐやうに出来てゐるばかりでなく、かれはかわや厠へ通ふ時のほかは他の座敷へも廊下へも出なかつた。厠へゆく時でも、かれはりようそで両袖で顔をおお掩ひかくすやうにしてゐたが、どうかしてその其袖のあひだからちらりと洩もれた顔を見せられた場合には、誰でもその美しいのに驚かない者はなかつた。

彼女かれはひとり娘むすめで、しかもその家いえは城下でも聞えた大商人おおあきんどであるので、親たちは彼女が好むまゝに育てゝゐた。七つ八つになつて、かれは手て習ならいをはじめたが、勿論師匠けいこについて稽古するのではなかつた。かれは親達からあたへられた手本を机の上に置いて、いつもの暗い部屋で書き習つてゐたが、その筆ひつせき蹟は子供とも思はれないほどに見事なものであつた。どうして暗いところで

文字を書くことが出来るか、それも一つの不思議にかぞへられてゐたが、おそらく幼いときから暗いところに育つたので、かれの眼は暗いのに馴れたのであらうといふ説であつた。それから惹ひいて、かれは暗いところで物をみることは出来るが、明るいところでは見えないのではあるまいかと云ふ噂が立つた。誰が云ひ出したとも無しに、かれは ふくろうむすめ 梟娘 のあだ名を呼ばれるやうになつた。しかもその梟娘の正体を確かに見とゞけた者は、この城下に いちにん 一人もなかつた。

今度の触出ふれだしについて、梟娘は何うしてもいの一ど番に願ひ出なければならぬのであつたが、その家いえが富裕であるので、親たちも遠慮して差控へてゐるのを、町役人どもが相談して先まづ親たち

にも得とく心しんさせ、その次第を書きあげて差出すと、係かかりの役人も額ひたいを皺しわめた。なんにしてもこれは一種の奇病である。兎ともかくもみみようようにちちめめししつ

明 日 召連れてまゐれと云ふことになつたので、あくる日の朝、町役人どもが打揃つて梟娘の家うちへ迎ひにゆくと、親たちは氣の毒さうに断つた。

『なにぶんにも娘が不承知を申します。いかに説得いたしても、左さ様ような晴がましい御場所おぼしよへ出るのは嫌だと申しますので、わたくし共も困り果てゝをります。』

併しかし一いつ旦たんとゞけ出た以上、今いま更さらそれを取消すわけには行かない。殊ことに藩はん侯こうもその不思議な娘をひそかに御覧になるかも知れないといふやうな内意を洩もれ聞きいてゐるので、町役人どもは何ど

うしても彼女かれを召連れて行かなければならないと思つたので、かれらは暗い部屋にかくれてゐる娘をたづねて、親たちに代かわつて色々色々に説得したが、彼女は矢はり得とく心しんしなかつた。どうしても明るいところへ連れ出すのは免ゆるしてくれと云つて、かれは声をたてゝ泣いた。これには彼等もほとく持もて余あましたが、まへに云ふような事情であるから、彼等は自分たちの責任上、無理無体にも彼女を連れ出さなければならなかつた。そのうちに、彼等の一人が斯こう云ひ出した。

『この上は縛しばりからげても引つ立てゝ行ゆかなければならぬが、それれもあまりに無慈悲むじひで、当人は勿論、親たちにも氣の毒だ。所しよせ詮せんは世の光を嫌ふのだから、眼を塞ふさいで置いたらば、暗いところ

ろにゐても同じことではないか。さうして、上の御恩によつて、不思議の病気が平癒すれば、この上の仕合せはあるまい。』

『そうだ。それがいゝ。眼を塞いで行け。』

娘の机のうへには手習草紙てならいそうしのあるのを見つけて、これ屈くつきよ

竟うのものだと彼等はその草紙の一枚を引き裂さいて、娘の顔をつゝ、むやうに押しかぶせた。あるものは更に智慧ちえを出して、草紙の黒いところを丸く切りぬいて、膏藥こうやくのやうに娘の両眼りょうがんに貼りつけた。

これで娘もやうやく得心したので、親たちも町役人共もほつとしました。今年十三の美しい少女は、真黒な手習草紙かみきれの紙片かみきれに眼をふさがれて、生れてから初めて自分の家の敷居うちをまたいで出た。

かれは大きい黒眼鏡をかけてゐるやうに見えた。

『梟娘がお城へ行く。』

この噂が忽ち町々にひろがつて、見物人が四方からあつまつて来た。ふだんから梟娘の名ばかりを聞いてゐる町の人たちは一種の好奇心に駆られて、その正体を見とゞけようとして群つて来たのであつた。町々の町役人は鉄棒でそれらの群衆を制してゐたが、見物人はあとからあとからと押寄せてくるので、迎もそれを追ひ払うことは出来なかつた。町役人どもは声をからして叱り制しながら、わづかに娘の左右だけを鉄棒で堰切つてゐたが、その鉄棒の堰もうづ巻いて寄せる人波に破られて、心ない見物人は娘の肩に触れ、袖に触れるほどに迫つて来て、しげくとその顔を

覗くのぞのもあつた。

たとひ両方の眼は塞ふさがれてゐても、このありさまを娘が知らな
い筈はなかつた。かれは途中で幾たびか立ちどまつて、自分の家うち
へ歸してくれと訴へるのを、附添つてゐる人々が色々になだめて、
兎もかくも城のまへまで行きつくと、娘はまたもや立ちどまつて、
これから先へはどうしても行かないと云ひ出した。

『こゝまで来て何どうしたものだ。お城はもうすぐだ。』と、人々
は右みぎ左ひだりから賺すかしたが、娘はもう肯きかなかつた。

『わたしは歸ります。』

『いや、歸すことはならない。』

かうした押問答をつゞけてゐるうちに、娘の気色けしきはだんくりに

變つて来た。彼女かれは遮さえぎる人々を突きつけて、だしぬけに駈け出さうとしたので、もう腕づくのほかはないと思つた彼等は、右左から彼女の晴着の袖や袂たもとを捉へて引き摺ずつて行こうとすると、娘はいよ／＼すさまじい気色になつて、支ささへる人々を払ひ退のけ押し退けて、自分のまはりを隙間なく取りまいてゐる見物人の頭や肩のうへをひらく／＼と飛び越え、跳り越えて駈け出した。不意の出来事に人々は唯ただあれ／＼といふばかりで、そのうちの一人が娘の帯を引つ捉とらへようとしたが、手がとゞかないので取逃してしまつた。

両方の眼を黒い紙でふさがれてゐる娘は、見当が付かずに走つたのか、それとも初めからそこを目ざして走つたのか、彼女かれは城門外の堀際ほりぎわへ真驀地まっしぐらに駈け出したかと思ふと、およそ五六間けん

もあらうと見える距離をひと飛びにして、堀のなかへ飛び込んだので、その騒動はいよゝ／＼大きくなつた。大勢はつゞいてその堀際へ駆け寄つたが、水に吞まれた娘の姿はもう見えなかつた。城の堀へみだりに立入ることは国法で禁じられてゐる。殊に要害堅固な此城このしろの堀は非常に深く作られてゐるので、誰も迂闊うかつに這入ることは出来なかつた。町役人から重ねて其次第をとゞけ出ると、藩侯はんこうも頗る奇怪すこぶに思はれて、早速に堀のなかを詮議しろとの命令くだを下された。

藩中くつしでも屈指すいれんの水練すいれんの者がかはる／＼飛び込んで探りまはつたが、水の底からは女の髪の毛一筋すらも発見されなかつた。なまじひのお慈悲でわが子を召めされなければ、こんなことにもな

らなかつたであらうと、娘の親たちは今更に上を恨むやうにもなつた。町役人共も由ないことを届け出たのを後悔した。

梟娘の死——その奇怪な噂がまだ消えやらない其年の八月朔

日、巳の刻頃（午前十時）から近年稀なる暴風雨がこの城下へ

襲つて来て、城内にも城外にもおびたゞしい損害をあたへた。そ

の大暴れの最中に、外堀から黒雲をまき起して、金色の鱗を

かゞやかしながら天上に昇つた怪物のあることを、多数の人が目

撃した。人々はそれを龍の昇天であると云つた。さうして、それ

は彼の梟娘が蛇体に変じたのであらうと伝えられた。併し彼女

は最初からの蛇体であるのか、あるひは入水の後に龍蛇と変

じたのか、その議論は区々で遂に決着しなかつた。

うえだあきなり
 上田秋成の「雨月物語」のうち「蛇性の姪」の怪談
 のあることは誰も知つてゐるが、これは曲亭馬琴が水戸にい
 た人から聞いた話であるといふことで、その趣がやゝ類似してゐ
 る。「蛇性の姪」は支那の西湖佳話の翻案であるが、これは馬琴
 が自ら筆記して、讚州高松藩の家老に送つたものであるか
 ら、まさかに翻案や捏造ではあるまいと思はれる。龍の昇天は
 兎も角も、かうした奇怪な娘が奇怪な死を遂げた事実だけは、た
 しかに水戸の城下に起つたに相違あるまい。

青空文庫情報

底本：「青蛙堂鬼談 —— 岡本綺堂読物集二」 中公文庫、中央公
論新社

2012（平成24）年10月25日初版発行

底本の親本：「婦人公論」

1923（大正12）年9月号

初出：「婦人公論」

1923（大正12）年9月号

※表題は底本では、「梟娘《ふくろうむすめ》の話」となっています。

※新仮名によると思われるルビの拗音、促音は、小書きしました。

入力：江村秀之

校正：noriko saito

2020年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

梟娘の話

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>